
レンジファインダー・ハーツ

消炭灰介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レンジファインダー・ハーツ

【Zコード】

N4160M

【作者名】

消炭灰介

【あらすじ】

距離感をテーマに描く青春以上恋愛未満なワンシーンのオムニバス（の予定）

ひとつひとつが独立した話なので、どこから読んでも、ひとつだけ読んでもさしつかえなく、続きを読む気にならないのでご安心を。

01 ウタタネ

「べつくしー」

そのあまりにも男前なくしゃみに、耐え切れず笑いがふき出す。やわらかな光とやさしい風が立ち込める二人だけの教室に俺の声だけが響く。

その声が耳障りだつたのか、はたまた自分のくしゃみに驚いたのかは解らないが、くしゃみの発生源の少女はむくじとつぶしていた机から身体を起こす。

「おはようさん」

声を掛けても未だ半ば夢の中といった少女はねむけまなこをこすりつつ現実へ戻るため首をぐるりと回し教室内を見渡す。

黒板に書かれた落書きから開け放たれた掃除ロッカーへと視線は旅行し、最後は椅子に反対向きに腰掛ける俺に帰ってきた。

「なに？ そこにやけ顔」

毒のある言い方は決して眠いからではないだらう。だから、

「おまえの寝顔があまりにもかわいくて」

とはぐらかす。もちろん顔は見れない。

それに、本当のことと言つた場合、こここの場合は問答無用で拳が飛んでくる。

「あつや」

昔はもう少し素直な反応を見せたものだが、まじとにはや。

「みんなは？」

「帰つたよ、何時だと思ってる。授業はとっくに終わつてるよ」寝起きで視界が安定しないのだろう少女は目を細めてしかめて凝らして黒板の上に設置された掛け時計を見る。

「……4時10分……」

よく読めました。

時間を確認できたことに満足したのか、再び机に突つ伏そつとす

る少女の横顔を見て、

「ほら、ヨダレふいて」

俺はハンカチを差し出す。

少女はそれを受け取ると無頓着な手つきで口元の唾液をふきとり、一度開いて裏側に二つ折りしたハンカチを鼻に当てる。盛大に鼻水をかむ。

「鼻水はティッシュで処理しなさい」

いや、なんかね。

「花粉症だからしかたないでしょ」

「それ理屈にすらなつてないから」

聞く耳もたず。

唐突に少女は顎をあげると、痙攣のように二回ひくつく。それが一種の溜めだと気づいた頃には、

「べつくし！」

先ほどとの男前さんが光臨していた。

予備動作である程度解っていたのでどうにか大笑い避けられた。喉の奥で笑いを殺そうとしたところ蛙がつぶれた音ならぬ蛙をつぶす音的なものが鳴つてしまつたが。

しかし、少女は気にしたふうもなくハンカチで鼻ぐじぐじいじる。と首を下げ、「ううー」と唸る。くしゃみに対するあたらしいタイプのリアクションだ。仮にここで少女が「ちくしょー」とか言つても軽く引くが。

「帰るか」

とりあえず、動く気ゼロの少女に行動を促す。

「う。つく」

喉の奥から捻り出された奇音。

「なに？ いまの」

「しゃ……ひつく……くり」

その返答はしゃつくりを挟みながら。

「忙しいやつだな」

くしゃみにしゃつくり。

「暗い、電気」

点けろっとか。

「もう帰るから」

さつきのしゃつくりは肯定だったような気がしたのだが。少女は視線を落とし、逡巡するそぶりを見せると俺に向き直り無言でハンカチを差し出す。

「洗つてかえそうよ」

鼻水かんだんだし、せめてちゃんと四つ折にするとかさ。少し落胆した表情で少女はハンカチを制服のポケットにしまって、机の上で腕を組み、そこに頬をのせる。

「もうちょっとここに」

そこまで言つて少女はあぐびをひとつ。続いてしゃつくりをひとつ。

未だ湿り気を帯びた瞳はどこまでも深く、狂いそうなほど扇情的で、同時に俺の中に暗い感情を植えつける。状況確認といつてもいい少女への質問が喉までかかつたが、俺はどうにかそれを飲み下す。

そんな少女の瞳が不服げに俺のほうへと向く。

「学校は仮眠室を設置するべきだと想つ」

そうですか。

「生徒会にでも頼んだら?」

「あんたばか? そんな意見、通るわけないじゃない」

左様ですか。

ひつくり、ともつ一度しゃつくり。そこで一人は言葉を失う。

誰もいない教室の風は乾いていて、子供ものように薄暗い教室へと迷い込む。カーテンを揺らし、少女の髪をさらり、窓際に座る俺たちの許に桜の花びらをどづける。空気がこすれる音はどこか泣いているようでもの悲しい。流れる雲に一時身を潜めていた太陽が姿を見せるも、天空に栄えた頃の粗暴さはなく、今はただやさしく一

人の影を伸ばす。

俺はこの風景を知っている。しかし、俺が今いるここには俺はない
なかつた。ここには他の男がいた。今日はいない。

ひつく

と、少女のしゃつくりが響く。まぬけな響きだ。そのまぬけさか
らか、俺は先ほど飲み込んだ言葉を吐き出してしまった。なんとな
く、その能天気な雰囲気に許される気がした。

「おまえ、彼氏は？」

どうした？

言つてから後悔する。そんな間を与えず、

「別れた」

即答。ふられた。ではなく。

「ふーん」

俺は逃げるように一人が長い影を落とす教室へと視線を泳がす。
一瞬見えたその憂いを帯びた表情は長い付き合いの中で知つてい
る。だけど、それにかける言葉を俺は知らない。

「ふーん、かよ」

だから、毒に見せかけたその言葉は彼女の優しさだ。

響きは甘く、語氣は鋭く、だけどその心はちゃんと俺に届く。だ
から、他者が入る隙間のないその瞳は、ああ、まだこいつは夢の中
にいるんだな。と俺を妙に納得させた。

「さ、帰ろ」

少女はすい、と立ち上がり足元の俺の鞄を拾つて手渡す。俺は自
分の鞄を肩に担ぐ少女を尻目に先に出口へ向かつ。扉を開いたとこ
ろで背後から声がかかつた。

「あ、」

返事はしない。視線だけで後ろを向き、次に紡がれるであろう言
葉を促す。

「しゃつくり止まつたかも」

「おお、そりやよかつた」

素直に出たその言葉はなかなかに棒読み成分が多めだった。

少女たそがれが出るのを待つてから、静かに扉を閉める。

黄昏たそがれ前の日差し、やわらかな光が二人を包む。

「べつくし！」

二人きりの廊下には俺の笑い声がよく響いた。

01 ウタタネ（後書き）

作中で『少女』が出てきますが、これは『俺』と面識がないのではなく、そういう仕様です。別に名前をいちいち考えるのがめんどりだったわけではありません。……すいません半分嘘です。

このレンジファインダー・ハーツは青春と距離感というシリーズで一貫したテーマとは別に各章で1個か2個テーマを用意して書いています。今回記念すべき第一章のテーマはズバリ『幼なじみ』です。どうでしょうか、幼なじみのなんともいえない距離感と青春独特の寂寥感を演出できていたでしょうか。

技術的にはまだまだですが、これから日々精進してゆきたいと思いますので、生暖かい目で見守っていただけると幸いです。

最後に、

読んでくださってありがとうございます。

何か気づいたことやアドバイス、疑問、質問、誹謗、中傷などがございましたら感想のほうにどんどん送ってください。うれしくて小躍ります。

含んだ瞬間、バニラの香りが広がる。ひやりとした感触は一瞬、至福をもたらすと溶けて消えた。その満たされない感覚が手に持った木べらを何度も机の上の杯と口とを往復させ断続的な幸福を与える。

昼下がり、換気のためにクーラーの電源を落とし、開かれた窓からがんがんに熱気が流れ込む教室は人もまばら。うるさいといえば余生の最後を華々しく散らそうと奮い立つセミくらこで、それ以外では比較的静かな昼休みの時間が流れていった。

俺は午後の授業に備えて、購買で缶コーヒーとアイスを買い、ひたすらストレス値の減耗にいそしむという至福の時を過ごしていた。うだる暑さに辟易しつつ、アイスを食べる。そのこの上ない喜びを唐突に聞きなれた声が打ち破つた。

「聞いてください、私好きな人ができました」

あいさつ代わりに片を叩かれる。声の主はそのまま回り込んで前の空いてる椅子へと腰掛ける。机をはさんで向き合つ形となつた。

「またですか先輩」

という言葉はこないだも口にした気がする。無遠慮なあいさつに対する返事も兼ねて、

「今度は誰です？」

と外交修辞的な、質問になつていない質問を投げかけておく。

「こないだも話したB組の」

その話は聞いている。が、なんとなく、名前まで出されるのが不愉快だったので、

「あーあのこないだの人……」

と先輩の言葉を遮る。

「そなんです、やっぱり運命なんですかね」

会話が成立していない。しかも唐突に運命とか言い出した。しか

し、たぶん、言葉を発するまでに、この人の頭の中では運命に繋がる経験が回顧されたのだろうと解^{わか}る。だからといってその運命性がこちらに伝わるわけもないのだが。

俺は意識的にわざとらしくない小さな溜息をついてみせる。

「じゃ、今回も『負け』に缶ジュー^ス5本で」

言いながらアイスを一口呑ふ。幸せは口いっぱいに広がつてまた消える。

「増えてる？」

「このないだは3本だつた。

「ああ、そうですねこれじゃ賭けになりませんよね」
いちいちリアクションするのもめんどくさいので話の先を予想して答える。先に会話をすつ飛ばしたのは先輩だ。

「たしかに6戦6敗ですけど……」

先輩は言いよどんで、思案するよつて斜め上へと視線を滑りす。
「こんどこそいけるはずです」

その自信の根拠はなんだ？ と正面きつて否定^{否定}するのは可能だが、あまりにも酷なので事前に手に入れていた情報で牽制を試みる。

「の人、巨乳好きらしいです」

「なつ」

どうやら俺の言葉は見えないボディーブローになつたらしく先輩は身体をぐの字に折る。

一撃で相当グロッキーな先輩はふらふらと体勢を起^{起こ}す。両手の平を脇に当てる^{てると}と体の中央へぐいぐいと押し寄せ始めた。

「いや、よせてあげても先輩ではその域に達^{たど}るのは不可能です
もう一発入つたらしい。こんどはジャブといつたところか。

「じゃ、じゃあ」

何となく言わんとしていることはわかる。だから、

「偽装しても最終段階ではれるんじゃ意味無いんじゃないですか？」

と調子づく前に出鼻をくじく。

「じょ、徐々に減らしていくけば……」

「なんだそのエセ禁煙法みたいな考え方」

「彼の邪念を取り払うのは私です」

意味がわからん。

「払う側に邪念たっぷりすぎますね」

「つるさいです。私の魅力をもってすれば執行猶予があればなんとかできます」

「どこに魅力が詰まってるんだか」

「いけね、つい胸を見ながら言つてしまつた。

「名誉毀損で訴えます」

「とりあえずこれで示談にしてください」

俺は先ほどアイスと一緒に買ったまだ空けていない缶コーヒーを差し出す。

「よろしい」

受け取った先輩はさっそくプルタブに指をかける。

構わず アイスとストレスを減らす作業に取り掛かると、かちかち、という数回の金属音の後、缶コーヒーは俺の許へもどってきた。

「あかない

「はいはい」

飲み口を開けて再び缶を渡す。

先輩は何故か立ち上がり、それをぐびぐびと勢いよく飲み干す。

最後に、ふはと息をつき再び席についた。そして、ごつごつ、と机に額をつけ力なく、

「なんで、いつもだめなんでしょうね」

とさつきのは自棄飲みのつもりだったらしい先輩がコンパクトに落ち込む。

俺には原因が解つていて、でも、俺の心のどこかがそれを認めるのを拒否する。それを認めることは俺の想いが許さなかつた。口に出してしまつと認めてしまいそうで言えない。だから思慕と嫉妬と同情が絹なま交ぜとなつた心は毒となつて口を出た。

「どうせ本人を前にしたらなにも言えないとせに……」

それがなかつたら。そつ思つのは俺の欲目ではないはずだ。

「それに……」

口がすべつた。正確にはわざとすべらしたのかもしない。

先輩の問^とい質す視線から逃げるため、アイスを口に入れた後も役

目を果たした木べらかじかじ、と噛む。

噛みながらも頭のなかでは、直接真実を知るよりも俺という緩衝材を挟んだほうが先輩にとつても損傷が少ないはずだ。など、あくまで打算的なことが廻る。

なんて最低なんだ俺。

「実は……」

頭を起こした先輩の視線からはもう逃げられない。そのまま言葉を続ける。

「彼女いるらしいですよ」

「じつん、と盛大な音を鳴らして先輩は机に額をつける。あまりにも音が大きかつたので教室の後ろのほうに残っていた人々が一瞬こちらをむいたが、音の原因を察すると満足したようで、すぐに談笑に戻る。

視線を先輩を戻すと両耳に手が添えられていた。

聞かなかつたことに対する。という腹づもりだろう。

俺もここまでできたら引き返せない、彼女に決意を促さなければ。

「……もう一回言いましょうか？」

ふるふると首が振られる。机との設置面の効果音は「じごり、だ。「こうなつたら彼を口にして私も死にます」なかなか物騒なことを呟^{つぶや}かれる。

「なに、言つてんですか」

「あ、そうか彼女を口にして私がくつつけばいいんですね」
ぱつ、と身体を勢いよく起こす先輩はとてもにこやかなしたり顔。「何その『あ、いま私はぐくいこと言つた』みたいな笑顔！俺には人としてどうかと考え方せられる言葉が聞こえましたけど！」道を誤らせないため一応つっこむと、こつん、と今までで一番大

きな音を鳴らせて、

「ふーん、そつかー」

あきらかにふてくれた。

額と机にはさまれた髪をじゅりじゅりと鳴らしながら首を回しちらを向く。

もの思ひしげな表情。伏した日にかかるけぶるよつな瞼、机上に散乱した髪。そのどれに俺の心臓が反応したかはわからない。頭に血が上る。気づいたときには言葉を吐いていた。

「ま、絶対無理って決まったわけじゃないですよ」

「励ましてくれてます?」

空の木べらを口に運んだことが照れ隠しでなかつたと心から祈る。

「やさしいんだ」

「べつに、可能性で言えば限りなくゼロだと思ひますけどね」

「ふふー」

意味不明な笑い。^{わら}意地悪な笑み。なんにせよ少しほは元気がでたようだ。

「そいつ」と言つ悪い子にはこれです

その次の動きはなんとなく予測できた。やにわに体をおこすと口を大きく開き迫つてくる。狙いは俺の手に持つ木べら もといその上のアイス。しかし俺がとつさに手を引くと「あ」というつめき声と共に開かれた口は空氣だけを封入して閉じられる。引き結ばれた口はそのままへの字に曲がる。

「けち」

缶コーヒーを奢つたはずだが。

「あーん」

くわせろ、ということだらう。先輩は大きく口を開ける。今度は自分から迫つてきたりはしない。

真つ赤な下のざらついた質感。粘性でもつて一枚膜が張られたような口の中はいやに官能的で俺の気はどうにかなりそうになる。

その口を閉ざすため俺は白い幸せを掬つて先輩の口へとぞんざい

に運ぶ。

くそ、こんなことならつづきのつづいて食べてしまはよかつた。
絶対後ろの連中が見てる。

「おっこですか

「ん」

それはなによりです。

木べらを引き抜こうとするが、奥歯でがっちらりかんでやが
るのか、なかなか抜けない。無理に引っ張ると顔もつい
てきた。

「離してください」

自制を促すとしづしづといった感じになつとつと口を離す。

そして、悠然と頬杖をつくと、溜息をひとつ。

「どこかにいい男はいないものですかね」

その台詞は俺を見て、何故かにやけ顔で。対する俺は、

「そうですね

と、ぶつかり返す。

木べらに田たを落とす。さつき俺がかじつたものとは違つ、あから
かに骨格の小さい歯形がくつきりと残つている。ひらつと上田で対
面を見れば、先輩の意地悪そうな笑み。
ためらつても癪なのでそのままアイスを掬つてほお張る。
バーラの香りは、一瞬で溶けて消えた。

02 エガオ（後書き）

作中での語は一章と同じ『俺』ですがこの一人は別の人です。まぎらわしくてすいません。

どうも、一章一章連続投稿です。

今回のテーマは『年上』 そうです一章に引き続きまたベタです。
恋多き先輩とエスつ氣のある年下男のワンシーンです。
一章がもの言わぬ想いつぱくなつてしまつたので二章では打てば響く会話を意識してこの二名をキャスティングしました。
あと貧乳ネタ。どうしてもやつてみたかったのでやつてしまつた。後悔はありません。けびりし反省します。

最後に、

読んでくださつてありがとうございます。
何か気づいたことやアドバイス、疑問、質問、などがございましたら感想のほうにどんどん送つてください。うれしそうでブレイクダンスを踊ります。

木の葉を揺らす秋風は火照^{ほて}った身体に冷たく気持ちいい。

一般生徒の下校時刻を終えた学校の外周にはほとんど人はいなくて、降り積もつた紅葉^{じゅうよう}に足をとられないように気をつけていれば最適とは言わずとも快適なランニングコースだ。

だが、三周目ともなると、さすがに景色に見飽きていたし、そろそろわき腹が痛い。だいたい毎日走ってるはずなのにこのところ毎回一周目で紅葉を見ると『わあ、きれー』とか思つてしまふわたし自身が少し悲しい。

そのせいで浮かれたわたしは一周目一週目をはりきり過ぎて、周回遅れのトップランナー爆走（？）状態だ。

これはだまされやすい、ということなのか？ 世界に。

だとしたら……なんだこのやうやんのかケンカ売つてんのか世界このやう。ど、わたしの地面（世界）を蹴る力が増してタイムが上がりつてレギュラー入り間違いなしながら、そういうのが現実らしい。

正門前の通りを抜け、学校と郵便局の間の角を曲がる。するとすぐ目に入るのは大楓^{かえで}。

太く、滑らかな幹は、まっすぐ空に向かうことなくまるでこの木の糸余曲折な人生ならぬ木生を示すかの」とく曲がりくなつていて、そこから伸びたあまたの枝はその想いを表すがごとく、ただ一点、敷地の外に向かつて伸びている。燃えるような紅い葉とまだ青い葉の濃淡は精彩とか風情とかいう難しい言葉がしつくりくる。

そういうわたしには難しい美しさ 違う。完全に理解の範疇を超えた美しさについていけず、わたしは、いつも、ただただ圧倒される。

さつきわたしは嘘をついた。やっぱり何回見てもこの木は綺麗だ。それは絶対だ。

秋はそんなに好きじゃなかつたのに、でもこの学校にきてから、この楓のおかげで好きになつたかもしれない。

その校舎裏に住まう敷地から大きくはみ出していていい『近所迷じやなかつた。みんなの心のよりどいろになつていてる楓を見上げつつ真下を走り去る。下への注意をおこしたつたから危づく積もつた落ち葉に足をとられそうになつた。

次の角を曲がると、さつきひつかつたのだろう片にかかつた紅葉の葉をつまむ。なんとなく元気を貰つた気がしてさつきより足に力が入る。

葉を手の中でもてあそびつまた次の角を曲がる。校門の前を通り過ぎればあと一周だ。わたしはスパートと呼べるかどうかあやしいものの一応速度を上げた。

顎を引き、意識を前に集中させる。

呼吸に一定のリズムを持たせ、肺に多くの酸素を取り込む。

瞬間　息が、止まりそうになつた。

彼が、いた。

校門の横、塀に背をあずけてわたしと同じように紅葉の葉を手でもてあそんでいる。

友達でも待つているのだろうか、でもこんな時間に？　こっちにはまだ気づいていないみたいだけ。どうしよう。話しかけたい。でも、無理。こっちにも心の準備というものが……。

わたしの心臓が秒を追うごとにその勢いと速さを増す。呼吸がつらい。走ってるからだ。いや、これは違う。これは短く、強く何回も息を吐く。

これはふりだ。

わたしはもう前しか見ない。

彼のことは視界に入らない。

そうだ、絶対に入らない。

更に速度を上げる。できるだけ彼のことを考えないよにして。

わたしは彼の前を横切る。

横切 なぜそれが分かつた？

今、完全に意識の外に出すように心がけていたはずだ。

なぜ？

わたしの目が勝手に彼を追っていた？

というか、いま一瞬、目が合つてなかつたか？

ということはわたし無視……した？ 無視された？

それ以前に気づかないふりして走り去ること自体がまずかつたんじゃないか？ 無理だつたんじゃないか？

嫌われた？！

向こうはわたしのことなんか眼中にない……か。

涙がこぼれそうになるとかはないけど代わりに大きな溜息をこぼす。

スピードを緩めて角を曲がる。

そこには一周前と変わらぬ姿の大楓。

いや、そんなことはないのだろう。散りゆく紅葉は刻一刻と姿を変える紅葉の証明だ。

それに対して、なぜこの楓は敷地の外へ外へと出るよう枝を伸ばしているのだろう。

外へ外へと腕を、その人の手に似た葉を伸ばして、けれど決して届かず今年も紅く染まつた想いを散らす。

そんな一生なのだろうか……わたしも。

そんなの、いやだ。な。

この楓みたいに美しくないけど、けど、わたしだつてこの手に掴みたいものがある。

この楓のように幾多の手は持つていないけど、わたしにはこの両手がある。自分で歩ける足がある。想いを伝える口がある。

それを使わないなんて大楓に怒られてしまう。

それとも抜け駆けしたら嫉妬を買うだろうか。

どちらにせよわたしに止まっていることなど許されない。

走り続けることだけがわたしに唯一できることだから。

楓を背にして角を曲がる。

五周田としては今までにない速度で残り二つの角も曲がる。

いた！

クラスの男友達と合流して帰るといつもよつだ。

また、一段と鼓動が強くなる。

チャンス 機会は一瞬。すれ違うとき。

胸が痛い。呼吸を整える時間がほしい。足が勝手に前に進む。なにか、なにか言わなくては。だけど、頭が働かない。肺から空氣がなくなつたみたいに喉を震わすことができない。

田が呟つ。彼も完全にわたしのことを認識した。もう逃げられない。

でも……声がない。

せつからく決意したのに、わたしあやつぱりダメだめだ。行動を先に起こしたのは彼のほうだった。

彼は手を擧げると、

「じゃあな」

すこしあにかんでそんなことを呟つ。

「うん」

うつむいてまま、そう返すのがやつと。

走る速度を上げて大紅葉もみじの待つ曲がり角へと逃げ込む。

木の葉を揺らす秋風は火照つた身体に冷たく気持ちいい。そしていまはすくべむずがゆい。

「ぐきゃ」

大楓からの嫉妬だろうか、積もつた紅葉に足を滑らせた。

そして、我ながらなんとかわいくない悲鳴。

幸せなことに今日のランニングは一周多く走ることになってしまった。

03 カケアシ（後書き）

やつちまつた……か？

どうも、消炭灰介です。

今回のテーマは『スポーツ』だったんですが、何だこの植物小説。
つ、つまらねー

でも、一回くらいはこういうモノローグ調のを書いてみたかったので満足です。そしていろいろと（自分の実力を思い知られたという点で）勉強になりました。

個人的に楓にはすごく女性的なものを感じます。なんか色っぽいんですね。

というわけで『03 カケアシ』一人で走っているとなんだか色々考えちゃいますよね？ ってお話です。

P . S .

01、02の誤字脱字と若干の本文（結構前に）修正しました。読みにくくてすいません。これで修正前よりはストレスなく読める小說になつたと思います。

しんしん。
と、雪が積もる音が聞こえる。

でもそれは錯覚で、雪は音なんか立てないことを私は知っている。
しんしん。というのも深深とか沈沈と書いてひつそりと静まりか
えった様子をあらわす言葉だということをも知っている。最近知った。
しんしん。今にぴったりの言葉だ。私たちはしんしんとした閑静
な住宅街の中を歩き続ける。

けれど、雪の上に残る足跡は一人分。
私は彼の背中で、彼の背中からは熱は伝わらない。かわりにくつ
ついた背中から鼓動が聞こえる。それが私の鼓動と重なつて今の氣
持ちの背中をぐいぐいと押す。

「重くない？」

私の言葉に、彼は雲のかかった夜空を見上げ、それから喉の奥で
くつくつと笑つてこう言った。

「重いって言つたらどうすんの？」

彼のそういうところが嫌いだ。

いつも人を小馬鹿にしたように質問を質問で返す。

だから、仕返しの意味も込めて首に回した腕に力を込める。

「うれじいよ、抱きづいでぐれで」

「ちがうし」

報復失敗。やつぱりこいつはなにもわかつていない。

彼の肩にかかつた雪を掃いつつ腕の力を緩めた。

深い吐息は白く長く、私の前にもやをかける。

いじわるで欲張りな雲は星の明かり逃すまいと必死に光をさえぎ
る。

そして下界にむかって笑つた。どうだ、悔しいだろ。って

だけど、そのおかげで、人々はともしひというものを手に入れた。

ぱつ、ぱつと駅周りの街中に比べてもうしわけ程度に据えられた街灯がくれる光は彼が歩くたびに降つたり止んだりで、そのつど私は目をしかめる。

あまりにも眩しいので私は彼の頭の影に隠した。

このまま、目の前の首筋に口づけしたら彼はどんな反応するだろうか。いや、やめておけ私。きっとまた大火傷するだけだから。

「鼻息くすぐったいんだけど」

その指摘にあわてて顔をあげる。彼の後頭部の先では白いもやは上へと伸びていた。

「そ、そんなに鼻息荒くないし」

乙女に向かつて鼻息とは失礼な。

「じゃあ、程よく気持ちよくて興奮する」

「変態」

彼は言葉の代わりに喉の奥で笑つて「まかす。

あたまに積もった雪も掃つてやるが手の長さの関係で掃えないところがある。

「ちょっとこっち向いて」

「え？」

「いいから」

「振り向かない、また首絞めるよ」

言うと振り向きかけた首が再び前を向いた。

「あ、いま振り向きかけた」

言わなくともいいことを言つ私は意地悪だらうか。

「まあね」

彼も彼で、ここで口を尖らせて反論を言えばかわいいものを、喉の奥で笑つて私の言葉をするりと躲す。

後ろからは彼の顔を見ることはできないが見えなくともわかる。そこには意地悪な笑いを浮かべている。

「あのや」

「ん？」

「ありがと」

「ん」

見なくともわかるきっとそこには私の好きなはにかんだような笑顔。

私を支える彼の手には私がさつきあげた手袋、そのせいで彼のぬくもりは私には伝わらない。熱は伝わらないが彼の心臓の音は伝わる。私の鼓動も彼に伝わっているのだろうか。

目の前には立ち上る一本の白いかすみ。ふりかえれば、雪上に押されたたつた一人分の足跡。それをしんしんと積もる雪が消そうと必死に薄くしていく。

今なら言えるかもしれない。

必要なのはほんの少しの勇気。

「あのさ」「

しんしん。

雪が積もる音に私の言葉はかき消される。

「なに?」「

「なんでもない」

「そか」

気づいてるくせに、言葉をばぐらかす。

彼のそういうところが嫌いだ。

しんしんと雪が降り積もる閑静な住宅街。足跡は付けたそばから消される。それでも歩みを止めない彼の足は必死に一人分の重さで雪を固めていった。

04 テブクロ（後書き）

突發的発足コーナー！

レンジファインダーNG集！その1

必要なのはほんの少しの勇気。

「あのさ、チャック開いてるよ」

しんしん。

雪が積もる音に私の言葉はかき消される。

「なに？」

「なんでもない」

「そか」

気づいてるくせに、言葉をばぐらかす。

彼のそういうところが嫌いだ。

しんしんと雪が降り積もる閑静な住宅街。足跡は付けたそばから
消される。それでも歩みを止めない彼の足は必死に一人分の重さで
雪を固めていった。

とゆ一わけで『04 テブクロ』お送りして参りました。

テーマは『熱』です。

厚着してると以外と体温って伝わらなくね？ といつお話です。
もうお気づきの方も多いと思いますが、この作品、章を追うごとに、
春夏秋冬と物語の舞台の季節が移り変わっていきます。次回はやつ
と春です。まあ一巡目だ！

カレンダーを見る限り口中が夜より長くなつてはや一ヶ月。最高気温がなんのかんのいつてもまだ肌寒かつた数日前とは違い、やつと体感的にも暖かさというものを実感できるようになつてきた。陽気と日光に当たられるにつれ街々の景色は彩度を増し、鼻に抜ける風の香りは春の訪れを感じさせる。

そう、季節は春。

昔こそ、春という季節にちゅうちょとかお花畠とかメルヘン極まりないイメージが先行しがちな純情少年だったが、春は馬鹿とか虫とか花粉症とか変態とかとか、なにかと湧くらしい季節として有名なのは言つまでもない周知事実らしいのは薄々感ずく年頃の俺今日この頃であるからして、もう少し心の準備が欲しかつたかと問われればYESと即答できるほどにピュアボーイは捨てきれていたかららしい。なにいってんだ？ 俺。

と、脳内お花畠が倒錯氣味に咲くほど、俺の隣歩くこの少女との出会いは衝撃的だった。

そう、この少女も変態さんとカテゴライズするのに申し分ない人種だった。

こいつ、いつ湧いたのか進級早々（少女にとつては入学早々）俺の周りに出没するようになつて今では登下校を共にするようになつた。今も何故か帰路につく俺の横をちょこちょこ付きまとつてくる。まあ、そこまではいい……いや、よくないがいいとする。百歩譲つて。

「ああ！ 何でだろ？！」

だが、しかし… 一言、一言でいいから言わせてくれ。

「女の子のエロトーク聴いてるのに相手がおまえだと全然興奮しねえ！」

つーか、話す内容も妙だし。なんだこの虚無感。

「ガニ股で自転車のスタンドを立てる女の子萌へ」

「無視かよ！」

おまえ、いたいけな青年の純情を一つ壊してんだぞ！ わかつてんのか？！」

「あ、あと『3D』つてたまに『H口』つて読んじゃいませんか？」「や、すいません。もうついていけません」

「私が思うに、3がEに見えるんですね、口はそのまま口に見えちゃうんですよ」

「だから、ついていけないって」

「ほらEつてローマ字読みでHつて読むじゃないですか」

「聞いてないっす」

正確には聞いているのだが話の次元が常人からかけ離れていて理解できない。

「あ、そうだ、先輩」

「なんだ！？」

「そろそろ私たちが出会つて一週間ですね？」

「ああ？ そうだけ？」

もうそんなに付きまとわれてんのか、俺。

「だからお祝いに私」

言いながら俺の隣の少女は上田遣いに俺の顔を覗き込んでくる。その頬はそういうメイクなのか若干上気したようにも見え、黒田がちな目も普段より湿り氣を帶びている感じがする。

今しがたまで足の動きと間逆に振り子運動を繰り返していた両手も、なにかを恥らつように入力端子を噛んだのとほぼ同時に田の前の信号が赤に変わった。

「今日、ノーパンなんです」

「はあ！？」

あやうく赤信号渡るところだったじゃねえか！ 殺す気か？！

「先輩、目が泳いでますよ？」

「つをつけ」一つ以上の意味で。

「あ、わかつちゃいました？」

「そうだろう、さすがにそんな変態さんが俺の周辺に居たら困る。そんな現実があるならサンタさんだって信じてやる。

「実は下着、全部着けてないんです」

言つて、少女は腕組するように胸元を隠す。

「…………」

さすがに言葉を失う。

いや、この少女ならやりかねないのか？

いやいや、きっとうそだつて、なあ？ サンタさん。うれだつて言つてくれよ。

信号が青に変わると、少女はけろつとした態度で鼻歌まじりに歩き出す。

少女が軽快に歩を進めるにつれ疑惑のプリーツがゆらゆらと揺らめぐ。そして俺の心もゆらゆらと揺り……

だー！

静まれ、俺の眼球。これ以上視線を落とすな。そうだ、顔を上げれば自然と視線もあがるはず。そudsうだ上を向いて歩こう。ね、ほんとに、何故だかわかんないけど涙がこぼれそうだからさ……て、おい、網膜！ なにちやつかり脳内に保存ちやつてんだよ、なに？ 太もも？ いや、違うだろ、それこそあいつの思い通り、というか本来の目標はそれより上にあるのであつて決して……って、おい！ 僕！ しつかりしろ！

「なにいやつてんですか？ 先輩」

「あ、いやこれはその…………」

どうやら脳内トリップしたまま五十メートルくらい進んでしまつていたらしい。焦点を合わせると振り向いた少女が心配そうな表情で佇んでいた。

「もしかして……先輩？」

言しながら少女は目を細める。そのしぐさが少し幼さの抜けない

少女の容姿をそこはかとなく妖艶に魅せて、思わず目を逸らしてしまった。

「欲情しました？」

「どころなく嬉しそうに声を弾ませる少女。

「まさか」たぶん。

「いらぬ劣情を催しました？」

「いいえ」断じて。

「そうですか……」

はあ、と、少女はため息を一つ。再び俺の横に並んで歩く。

少女の歩幅は俺よりかなり小さい。一週間前は意識して歩いていた記憶があるが、どうも自然に同じペースで歩けるようになったみたいだ。それは俺が遅くなつたのか、少女が早くなつたのか、あるいはどちらもか、分からぬがそれだけ時間がたつたという事実の痕跡を見ていよいよなんとも微妙な気分になる。

少し肩をすぼめて歩く少女。何を思つて俺につきまとうのか、予想ができないほど俺は馬鹿ではない。それでも、からかつてゐるだけか？ そもそもなんで俺？ とか訝る俺は人としてどうなんだろうか。

だからこれから言ひことは、つとめて「冗談交じりに、

「ああの、や」

しまつた！ こきなつともつてしまつた。

「なんですか？」

吸い込まれそうなほどに澄んだ少女の瞳。その中に俺はどう映つてゐるのだろうか。

決意の深呼吸を一つ。

よし！

と、そのときだつた。肺のスペースを鑑みるに俺のせいだとは考え難いが、一概にそれが俺のせいだともいいきれないわけで、ここで人間が呼吸することによって大気が動くことがありえるのかとご高説つぽいものを脳内で垂れようとも思わないこともないのだが

俺の知識では不可能に近い所存なので割愛。

一言で言えば風が吹いた。それも結構強めな。

春の香りを孕んだ、ぬるく、湿つたよつこまとわりつく風。秋や冬とは違い、揺れる木々は潤つた葉の音を鳴らし、風の道を教えてくれる。

「きやつ」

声に振り向けば、風によつてめぐられたスカートを少女が必死に押さえ込んでいたところだった。

俺の視線に気づいた少女は、顔を真っ赤に染める。

「見ました？」

もうばっかりと。

「欲情……しました？」

あ？ するわけねーだろ！」のつをつき。

というか、恥ずかしいなりかつこう質問はするな、わざより顔赤くなつてゐるぞ。

あ～、くそ、なぜか意思とは裏腹に頭に血が上る。
遺憾だが、おそらく赤くなつてゐるであろう顔を見せないため、俺は先行し、少女からワードをとる。

「まあとりあえず……」

「な、なんですか？」

決意の出鼻をくじかれた落胆もそこそこ、手を頬に添えてみる。やはり、ひやりとして気持ちがいい。

まあ、とりあえず……いま少女に言つてやりたいことがある。それは一週間も俺に付きまとつてくれた感謝と報復をかねて。つとめて無愛想に、なるべく無頓着に、肩越しに振り返つて、一言だけ、

「3DをなぜかH口と読んでしまつあなたは病氣です

05 ソヨカゼ（後書き）

突発的発足コーナー！ レンジファインダー・ハーツ恋愛相談室！
ここでは青春以上恋愛未満をテーマにお届けする『レンジファイン
ダー・ハーツ』にちなんだ空前絶後の恋愛相（以下略）

Q このあいだ好きな口に『好きだよ、愛してる』とギリギリ冗談
に聞こえるよう告白したところ『うわあ、うそ、てかキモ！』と返
されました。これって脈アリですかね？

A そうですね、とりあえずあなたはドMだと思います。

ご無沙汰してます消炭です。

次回は春！ とか大見得きつてしまつたくせに4ヶ月も間が開いて
しまいました。いやはや、お恥ずかしい限りです。

そして、待つていてくださつた方（そんな奴いない？ 夢をみさせ
ておくれよ）お待たせしました！

そんなこんなでレンジファインダー・ハーツ『05 ソヨカゼ』テ
ーマはなんと『Hロス』です！
どうでしょうカリビンドーが進つたでしょうか？

次回はもう少し早く投稿できればいいなと思っている所存で『じゃ』
ます。

それでは、今回は、空砲の大砲より実弾の拳銃ほうが強い。といふ
お話をでした。

異常な熱気に出現する蜃氣楼。なんてことはなく、それは俺の頭に流れる記憶のリフレイン。

そう気付いたころには教室には誰にもいなかつた。

「うあ～」

俺は頭を抱えて自分の机に転がる。「うだる暑さに……ではなく。俺の頭をよぎつた蜃氣楼に。

「なにしてんの？」

頭を抱えた腕の隙間から見上げる。そいつは俺の隣に立っていた。見下す視線は高圧的、でもどこか面影がある。

いつのまに、なんて思わない。風を教室に通すために開け放たれたドアは人間などスルーだ。誰が入ってきてもおかしくない。それ以前に俺はクラスメイト全員が出て行つたのにはすら気付かなかつたのだから。

「落ち込み中」

素直に告白。そして自滅。一つ以上の意味で。

「馬鹿らし」

少女は俺の隣の机に腰をかけると足を組んで、わざとらしく顔と身を反らした。夏の日差しはまだ高い位置にあって、少女の影を短く落とす。

「誰のせいだと思つてやがる」

責任転嫁……というよりハツ挡たり、けれど、

「私の姉のせい」

「正解」

少女は見事当てるみせた。

俺は落ち込んだふりをして、どしゃり、と、また机に突つ伏す。頭に上った熱に机の冷たい感触が気持ちいい。というか机つてこんなにすべすべだつたんだな、俺の身を支えるその包容力、女性的なす

べすべの質感。シンプルかつ木目調というアクセントの効いたステレオではあるが堅実なデザイン。うお、すべすべ、やべー、このまま机に惚れそうだ（もちろん恋愛感情的な意味で）。……はあ、このまま傷心も癒してくれないものかね。

しかし、どうも、居づらい　　など語弊があるが、前門のエ
ンジニヤーに後門のデビルというか（はい、笑うところだよ君）右頬は
こんなにも気持ちいいのに天井に晒した左側等部がやけに辛い、
…いや重い？

怪訝に思つて、がばつ、と顔をあざて見るといふ。

二三九

「別に」

しかも、用を命ぜると、ふいに、そつほに向かれた。

そう思つて、また、どさつ、と俺は机にダイブする。

11

がばつ。

三一〇

「」

二〇

五〇

二〇一

「」

がばつ。

「あのね」

「そのままだと俺、頭上げたり机に打ちつけたりしてる変な人でしょうが。

「なに？」

その言葉は突き飛ばすように鋭い。

「さつきも言つたけど俺落ち込んでんの、だから一人にしてほしいわけ」

「だつたらさつと家にでも帰れば？」

少女はそっぽを向いたまま言つた。

はあ、と俺の口から自然とため息が出た。

「お前な……」

少女の白い頬を見つめる。

はあ、何を言つても無駄そうだ。

じさつ。俺は再び夢の中へ傷心旅行へ

「……」

確認しなくとも刺さります視線。どうでもいいけど。

停滞した風は教室中の温度を上げて、空気中を漂ひ、多すぎる水分たちは汗の蒸発を妨げる、茹で上がるような暑さも今は何故か心地いい。

ふと、頭が軽くなつた感じがする。

それから、少女が重々しく唇を開く息使いが、静謐を張り詰める教室で、いやといつほど分かった。

「やつぱつ……私と居ると氣まずい？ 姉貴にそっくりだから意識する？」

先ほどのような鋭さのない声は弱々しく、意識はしていないんだろうが、トーンやイントネーションまでそつくりで俺の胸を打ちつける。

「…………姉妹だからな」

どうとでも解釈できるように濁す。そして、突つ伏した机に強く

しがみつぐ。正直顔なんか見てられなかつた。

うん、そうだ、やつぱり俺はお前しかいないぜ、ああ、机「〇×E—！ T・S・U・K・U・E、つーくーえ！

と、俺が無心に机に頬ずりしていると、

「つてえ！」

思いつきり頬をつねられた。そのまま上に引っ張られて、つられて立ち上がつてしまつ。

心の奥で嘆息しつつ、少女を冷めた目で見つめる。

というかまだいたんですけど、俺と机のランデブーを邪魔しないでくださいよ。

俺は頬をつかんだまま離れない手を外そと上から手を被せる。少女は何故かそれに過剰に反応して体をよじつた。そしてその反動で反対方向から手が飛んできた。

「つてえ！」

頬をはたいたのは平手かと思つたらグーだつた。俺は不意打ちによろけて尻もちをつく。（尻が）けつこつ痛い。

俺は抗議を込めて少女を睨みつける。

少しばひるむかと思つたが少女は逆に鬼の形相でにらみ返してきた。

「馬鹿らし、みつともない！ たかだかふられたくらいで…」

少女のどなり声は廊下にまで響く。やけに長い反響かと思つたが、俺の脳が勝手にリフレインしてただけだつた。

「なつー！」

我に返り、あわてて少女と間合いを詰める。ヒッセに反応した少女の腕を使い口を塞ぐ。そして睨む。さつきの百倍は怖い顔してゐと思つ。

「お、大声で言つんじゃねー」

無音で警告を発する。しかし、まったく効果はなかつたようだ、少女はもがいて、口にあてがわれている俺の手からのがれると、ふはつ、と息をつき、また大声で怒鳴つた。

「ど、どうせ、最後の夏休みに、え、え工口に」とでもじみつと呟つたんでしょう！」

「お前な」

今度は、引かねーぞ。

俺は再び間合いを詰め、少女の手をねじり、口を塞ぎにかかる

「ぐほお」

俺のみぞおちに少女の華麗なロープローが決まった。

一瞬で肺から空気が抜けて、息が吸えなくなる。酸素が供給できなくなると分かった心臓はより一層、早鐘を打ち鳴らして、俺は地面にひれ伏すしかなかった。

腹を押さえうずくまる俺を見下ろすこと三秒、少女は、ぷいっ、と顔を背ける。

「あ、のな、けつこう、げほ、シャレになんないぞこれ」

呼吸はできないが、ひねり出すように真っ白な左頬に向かって一言。

「あたりまえでしょ？ 私は空手部主将」

「そうでした……」

俺はがつくりと地面に頭を打ち付ける。

ずいぶん呼吸が楽になってきた。

そして、俺は少女を見上げる。なんか俺たちの構図が女王様との下僕つて感じがする。

改めて見る少女の横顔はやつぱり似ていた。でも似ているだけで本人じやつてわけじゃないことを今のロープローで思い知った。それでも俺は情けないことだが少女の横顔に幽霊を見てしまう。そいつは俺の顔をしていて笑いかけてくる、そして俺の肩を叩いて教えてくれる。青春の甘酸っぱさとか人生の厳しさとか恋の偉大さとか。「ん？」

そういえば、なんか、違う気がする。

少女の横顔を記憶と照合 、あ。

「そういえばお前、髪、切ったよな？」

少女の首が勢いよく回って俺に向き直る。表情の変化も勢いよく、そして変だ。口元はにやけているのを必死で隠すみたいに歪んで、目と眉は鬼と見まじうほどにつりあがっている。

「は？ なに、今頃気づいたの？」

怒っているのか笑っているのかいまいち判断しかねたが、声が今までにないほど優しかったのでたぶん怒っていることだろう。ここはこれ以上は触れぬが吉だ。

しかし、ちゃんと見れば少女は結構な長さの髪を切ったことが分かる。活発な少女にはボーアイツシューな髪形も似合つてるが……個人的には前のほうがよかつたかな。

「あんたは前のほうがよかつたでしょ、姉貴に似てて」

「お前はエスパーか」

「やつぱり……」

言つて、少女は俯き、

「だから嫌だつたの」

消え入りそうな声で、たぶん、そう言つた。

「何が？」

「なんでもない！」

「ぐはっ」

またロープローか！

あれ？ でも今度は痛くないぞ？

腹から視線を上げると少女の姿はもういなかつた。

「こつち！」

声がかかったのは扉のほうから、視線を追いつかせると少女がドアに手を掛け、仁王立ちしていた。

その目はかつてないほど真摯に輝き俺を見つめる。

その瞳の中に一瞬先の未来を想像して、鼓動を高鳴らせてしまつ。少女はめいといっぱいに息を飲む。そして、一回瞬き、そして口を開く。

「ベー！」

舌先をめいといっぱい出して、器用に効果音を発しながら。そして自慢げな微笑みを浮かべると、走りさつていった。

「なんだかな」

一瞬だけ、ほんの一瞬だけ、その微笑みの裏の幽霊が消えて見えた。

面影のないその笑みは、たしかに俺の知らない表情だった。

06 オモカゲ（後書き）

告白します！ 今回の話、構図が『01 ウタタネ』に似ていますね、そんなこんなで自分の引き出しの狭さに落胆しつつ『06 オモカゲ』です。

テーマは『失恋』と直球で内角を攻めてゆく姿勢は崩しません。構図のことは書いてる途中で気付きましたが、「男女逆だしこいつか」と二一ツ根性丸出しでお送りしました。

『06 オモカゲ』ちょっと(いや、だいぶ?)分かりづらい話だと思いますが、一回くらい読んでやつてください(ーー)m 机が大好きというお話ではありませんよ(笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4160m/>

レンジファインダー・ハーツ

2011年1月25日00時25分発行